



医療法人 真生会

真生会富山病院

SHINSEIKAI TOYAMA HOSPITAL

第30号 令和4年3月発行

〒939-0243 富山県射水市下若 89-10

TEL : 0766-52-2156 FAX : 0766-52-2197

<https://www.shinseikai.jp/>

地域連携だより



「平等でかけがえのない尊い命」を 大切にする医療を目指して

すべての人は「平等でかけがえのない尊い命」を持っていることを昨年、職員、皆で確認しました。どんな人の命も平等であること、どんな人もかけがえのない存在であること、そして、どんな状態になっても命の尊さは少しも陰ることがないということです。言葉そのものは平易で誰しも理解し賛同できます。しかし、これを正しく理解し、その通りの行動ができるかどうかには別次元の難しさがあります。新年度では、職員皆がこのことの意味を正しく理解し、行動できる医療人を目指したいと考えています。「能力で人を差別してはならない」とよく理解できても、私たちが住む社会や育った環境は能力で人に優劣をつける構造になっています。その環境で生きてると無自覚のうちに、能力の劣る人を見下す考え方が染み付いてしまうことを否定できません。自分で自分のことが満足にできなくなってしまわれた高齢の方にタメ口やぞんざいな対応が、つい出てしまったとすれば、そんな心が元になっています。

人の価値は能力で決まるものではありません。ましてや、経済活動の^{たか}多寡などは一切関係ありません。目の前に見えることだけで人を判断するのではなく、その方が歩んで来られた人生に敬意を持って接し、次の歩みに無限の可能性のあることをその方が感じ取っていただけるような医療を提供できる医療機関になりたいと思います。



院長

まなべ やすひろ
真鍋 恭弘

糖尿病と認知症

糖尿病センター センター長

ひらたに かずゆき
平谷 和幸



糖尿病と認知症は密接な関係があります。

高齢の糖尿病患者は、認知機能低下、サルコペニア、転倒、骨折等の老年症候群を2倍起こしやすいことが知られております。また、認知機能障害が出ると、糖尿病の自己管理の食事、運動、内服、インスリン注射といった治療の低下につながり、さらに血糖コントロールは悪化します。血糖コントロールが悪化すれば、肺炎、尿路感染症等のさまざまな感染症のリスクも高くなります。

現在、糖尿病の治療も進歩しており、各種の介護サービスを受けながら、在宅でも認知症、糖尿病の治療を継続することができます。

症例 1 高齢で認知症があり、インスリン治療が必要な方でした。しかし、自分では、インスリン自己注射、自己血糖測定をすることができず、血糖値の変動が分かりませんでした。そこで、週に1回の訪問看護のサポートとご家族のサポートを得て、持続血糖測定のできるフリースタイルリブレを導入しました。

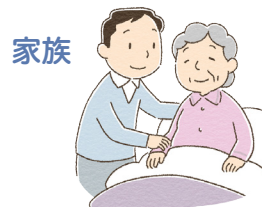
腕に500円玉くらいの大きさのセンサーを取り付ければ、血液を出さずに血糖値が記録され、診察の際には、1ヶ月間の24時間血糖値を振り返ることができます。センサーは2週間に1回交換なので、訪問看護の看護師が訪問した際にセンサーを装着してくれました。

読み取りのリブレリーダーを、服の上からでもセンサーの上にかざすだけで、「チャリン」という音とともに、血液を出すことなく「血糖値」が表示されます。1日に何回でも測定できます。ご家族とデイサービスの職員とが協力して1日に4～5回測定してくれました。

今まで診察の際にまったく分からなかった血糖値の推移が分かるようになり、適切なインスリン投与ができるようになりました。血糖コントロールも改善し、在宅での治療を長い間、継続することができました。



訪問看護師



家族



デイサービス職員



フリースタイルリブレ

症例 2 高齢で認知症があり、血糖コントロールも不良な方でした。訪問看護師に訪問してもらい、週に1回「GLP-1 作動薬」という注射をしてもらいました。この注射は少し小太りの方の血糖値をよく下げ、食欲も若干抑えてくれます。認知機能が低下し、食欲のコントロールができず、肥満傾向の方の血糖コントロールには非常に有効です。看護師の訪問も週に1回で良く、それでいて良好な血糖コントロール、体重コントロールが得られました。



認知症への取り組み

当院では、認知症への取り組みとして、認知症カフェと認知症サポーター養成講座を開催しています。

●カフェなでしこ ～ともに学び語り合う～

2カ月に1回、院内のレストラン「グリーンハット」で開催しています。「認知症についてともに学び語り合う」をコンセプトに、企画と講義がセットになったイベントです。学びたい方にとって「医師から認知症の話が聞ける」と好評です。

※開催の可否は、新型コロナウイルスの感染状況に応じて判断いたします。



講義をする二村明広医師（副院長）

●認知症サポーター養成講座 ～正しい理解と対応を～

認知症に対する正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けを行う「認知症サポーター」の養成講座を主に職員対象に行っています。開催にあたっては、大門・大島地域包括支援センターの方にもご協力いただいています。



前は回は約20名が参加した

こころの家で初コンサート

令和3年12月16日（木）に「こころの家」で初めてのコンサートが開催されました。その名も「ハートフルコンサート」です。看護小規模多機能型居宅介護施設であるこころの家は、令和3年3月に開設し、この春ちょうど1年を迎えます。

コンサートに出演したのは真生会の音楽サークルメンバー。毎年12月に真生会富山病院で開催していた「ウィンターコンサート」が恒例行事でしたが、コロナ禍でここ数年は休止していました。今回はちょうど第6波が始まる前で、感染状況が落ち着いていたことから実現しました。

メンバーは歌声に乗せてギター、ウクレレ、キーボードなどの演奏を披露。参加されたこころの家の利用者さんたちは、大きな拍手で盛り上げてくださいました。最後は院内コンサートのラストソングで定番の『上を向いて歩こう』で締めくくり、参加者から演者に向けてアンコールの声援とともに「また来てね」と温かい言葉が送られました。（※感染対策を徹底して開催しました。）



手拍子でコンサートを楽しむ参加者の方々



院内コンサートでおなじみのD.A.T
刀塚医師（左）と明橋医師（右）のユニット



ギター&ボーカル 吉田医師



ウクレレ&ボーカル 埜村看護師

症例 3 比較的若年ですが、認知症の2型糖尿病の患者さんです。相当血糖値が高く、本来であれば、1日4回のインスリン注射が必要でした。しかし、自分がインスリンを打っていることも、治療していることも分かりません。内服薬では、とても血糖コントロールはできませんでした。この方には週に5回、訪問看護に入ってもらい、1日1回ですが、2種類のインスリン注射をしてもらっていました。残念ながら十分なコントロールはできませんでしたが、最善がだめなら、次善、三善という方針で行いました。

上記の症例のように、現在の糖尿病治療はさまざまな選択肢があります。患者さんの病状、家族のサポート体制、介護度、使える介護サポートを総合的に勘案して、その人に合った治療法を選択できる時代になりました。内服薬においてもヘルパーさんに内服確認をしてもらい、残薬を減らすこともできます。

あらゆる医療資源、介護資源を使って、高齢、認知機能低下の糖尿病患者さんに、家にいながら治療継続をしてもらいたいと考えております。

ご本人だけではなく、ご家族の方にもぜひ主治医とコミュニケーションをとっていただき、よりよい治療をともに目指していきたいと考えます。



もの忘れ外来（専門外来・予約制）



もの忘れ外来担当医
とよだ しげお
豊田 茂郎
(副院長)

.....
【実施日】 火曜日 15:00
.....

超高齢社会になり認知症の患者も増加しています。もの忘れ外来では、治療可能な認知症を診断し、アルツハイマー型認知症などの進行性の疾患でも、進行を抑える薬剤の投与を検討します。そして、認知症の患者が社会の中で生活していけるように、多職種と連携し、必要な支援を検討しています。